

# 強者の戦略

こんにちは。『我が身にたどる姫君』、いかがでしたか。今回は解説編です。

次の文章は、『我が身にたどる姫君』の一節である。中秋の名月の晩、「宮の中将」と「殿の中将」の二人は、洛中のある邸で過ごした後、西の郊外にある上皇(嵯峨院)の御所を訪ねることにした。これを読んで、後の問に答えなさい。

月はふけゆくままにいとど澄みのぼりていふよしなきに、「ア院こそなほゆかしけれ。今宵いかながめおはしますらむ」と推し量り聞こえて、みな馬に乗りかへて嵯峨に参り給へれば、「イ思ひつるもしるく大殿籠らぬ御けしきにて、琴の御琴弾きすさませ給へる、ウあたりの松風さへそぞろ寒きに、笛を同じ調べに吹き合はせて、二人中門のほどにやすらひ給へる、かぎりなくおもしろし。

いといたう待ちよろこばせ給ふ。やがて「コなたに」と召しあれば、これも姫宮のおはします御簾の前を、死ぬばかり思ふべし、いといたう用意して歩み出で給へるさまども、いづれとなくめでたし。「今宵は内の御遊びなどもやと思ひつるを、暇ものせられけるを。」ワわざとこそおどろかすべかりけれ」とのたまはず。

(宮の中将、)

オまづぞ思ふ都の秋の月見ても君すむ宿の松風の声

殿の中将、

カ飽かなくに出でし雲居の月影を慕ふ心のいつかおくれむ

と奏し給ふは、もの怨じさがなくし給ひし宮の御腹なり。

(『我が身にたどる姫君』による)

注 ○姫宮＝嵯峨院の皇女。

○おどろかす＝ここでは「誘う」の意。

○もの怨じさがなくし給ひし宮の御腹なり＝殿の中将の出自の説明。「殿の中将は酷く嫉妬をなされた宮の御子なのであった」の意。

問一 傍線部(ア)(イ)(ウ)を現代語訳しなさい。

問二 傍線部(エ)「わざとこそおどろかすべかりけれ」と院が言ったのはなぜか。

問三 傍線部(オ)について、掛詞に注意しながら現代語訳しなさい。

問四 傍線部(カ)の和歌について、ここで用いられている比喻を説明しなさい。

# 強者の戦略

## 【解説】

『我が身にたどる姫君』は擬古物語の一つです（作者は不詳）。「擬古物語」というのは、鎌倉時代頃から近世にかけて成立した、平安時代の王朝貴族を主人公とする物語のことです。平安時代を舞台としていますが、鎌倉時代以降に成立しているため、平安時代の古典文法を基準として古文を学んでいる高校生の皆さんにとっては、読みづらい箇所が含まれる場合もあります。

内容としては『源氏物語』の影響を受けた作品が多く、この『我が身にたどる姫君』も例外ではありません。四五年間という長期間にわたる物語（『源氏物語』は約七〇年）で、人間関係も複雑です。全体の主人公はとある皇女なのですが、非常に長い物語は「引用箇所における主人公」を特定して読解するようにしましょう。今回の主人公はリード文に登場している「宮の中将」と「殿の中将」の二人だと考えて下さいね。（便宜上、今後の説明では「主人公」と表現します）

リード文は本文だけでは分からない情報を提供してくれる箇所です。舞台となるのが中秋の名月の夜であること、舞台となる嵯峨院の邸は都の中心から少し西に外れたところ（「洛西」と言います）にあるということを意識しておいて下さい。超基礎知識ですが、「上皇」＝「位を退いた帝」ということも忘れてはいけません。それでは、内容を確認していきましょう。

「月はふけゆくままにいと澄みのぼりていふよしなきに、」

中秋の名月の晩ですから、月の美しさが描かれていると理解出来れば十分です。満月は真夜中に南中しますから、時刻は二四時に近づいてきているところですね。問題に絡んでいませんが、古文読解の際に重要な単語としては、

○「いとど」——ますます

○「よし(由)」——①由緒・理由・②手段方法・③趣・④主旨

が挙げられます。

「院こそなほゆかしけれ。今宵いかながめおはしますらむ」と推し量り聞こえて、」

基礎的な現代語訳問題です。

○「なほ」——やはり

○「ゆかしけれ」（「ゆかし」已然形）——①見たい、聞きたい、知りたい

②なんとなく慕わしい、なつかしい

# 強者の戦略

今回はリード文の情報により、これから院の邸まで二人が訪ねていくお話であることが分かるので、現代語訳でもその情報を活かしましょう。

訳出時の注意点としては、「ゆかし」をストレートに「院を見たい」としてしまわないことです。間違いでは無いのですが、そのように訳してしまうと、単に「院の様子を観察しに行きたい」ようなニュアンスになってしまうので、「院に会いたい」や「院の様子が気になる」といった内容の現代語訳にする方が良いでしょう。敬語は使用されていませんが、身分を考慮して「やはり院にお目に掛かりたい」と訳しても綺麗です。

「今宵いかながめおはしますらむ」は、「今夜、どのように月を眺めていらつしやるだろう」という意味です。「ながめ（ながむ）」は、恋愛の場面などでは「物思いに耽る」という訳出が定番の語句ですが、ここは中秋の名月という「眺めるべき対象」がある場面ですので、「月を眺める」で解釈して良いでしょう。現在推量の助動詞「らむ」がありますから、主人公の二人が洛中にありながら、洛西にいる院の現在の様子を推し量っている様子が表現されています。

「みな馬に乗りかへて嵯峨に参り給へれば、思ひつるもしるく大殿籠らぬ御けしきにて、**琴の御琴弾きすさませ給へる、**」

洛西の嵯峨に向かうために、皆が馬に乗りました。そして嵯峨院の邸に到着します。

傍線部(イ)の現代語訳で注意すべき単語は「しるく(しるし)」、そして「大殿籠ら(大殿籠る)」です。「大殿籠る」は「お休みになる」ですから、今回は打消の助動詞「ず」がセットになり、傍線部の後半は「(院は)お休みでないご様子で」となります。中秋の名月の晩に、寝ずに琴を演奏している。なんとも風流ですね。

問題は「しるし」です。「しるし」は漢字で書くと「著し」となり、「はつきり」として「しるし」を表します。第二義として「予想通りだ」という意味もあります。今回はこの第二義を使用すると綺麗に訳ができるのですが、第二義を覚えている人は少ないと思いますので、第一義から出発して第二義に近い解釈ができるようになります。なにせよ、定番の第一義で訳してみても違和感を覚えたら工夫をする、という姿勢が大切です。では、第一義から第二義を導く考え方を紹介します。

「思ひつる」は、「思ふ」と完了の助動詞「つ」。訳は「思った」です。すると、「思ひつるもしるく」は、「思ったこともはつきりと(あらわれて)」と解釈出来ますね。考えていたことがはつきりと現実になったとき、「予想通り！」とか「思った通り！」なんて表現しますよね？これで、第二義を導くことが出来ました。

本文の解釈に戻ります。主人公の二人は、「院は今晩月を眺めているだろう」と推量していました。実際に邸に着いてみると、「思った通り、院はお休みにならないご様子で」琴を演奏していたことが分かった、というわけです。

# 強者の戦略

「あたりの松風さへそぞろ寒きに、笛を同じ調べに吹き合はせて、二人中門のほどにやすらひ給へる、かぎりなくおもしろし。」

また傍線部が出てきました。ここの注意点は、副助詞「さへ」と「そぞろ」です。

○「さへ」——添加の副助詞。「までも」と訳す。

○「そぞろ」——何となく、むやみやたらだ

また、「寒きに」の「に」は格助詞と接続助詞の可能性がありますが、「寒いから笛を吹いた」とは考えにくいので、接続助詞で訳出するのは難しそうです。格助詞で解釈しましょう。傍線部(ウ)の訳出は、「あたりの松風までも何となく寒く感じられる中で」となります。(ちなみに、「そぞろ」の訳出を「むやみやたらだ」にしてはダメなのかと想った人。「むやみやたらに寒い」のは冬ですよ。秋に極寒のお月見というのはちよつと無理があります)

邸の中から聞こえてくる院の琴の音に合わせて二人は笛を吹き、中門(邸の敷地の内部にある門)のあたりで立ち止まっています。秋の晩の演奏は非常に趣深いものでした。

傍線部の(イ)あたりの箇所までだと、二人はもう院の邸に上がっているのかと思ってしまう人もいるかもしれません。この箇所を見て初めて、二人は敷地には入ったものの、建物にはまだ上がっていないことが分かります。

「いといたう待ちよろこばせ給ふ。やがて『あなたに』と召しあれば、これも姫宮のおはします御簾の前を、死ぬばかり思ふべし、いといたう用意して歩み出で給へるさまども、いづれとなくめでたし。」

ここはサツと確認しましょう。「いといたう待ちよろこばせ給ふ」の主語は分かりますか? 「せ給ふ」という二重尊敬が使用されていますから、院だと考えて下さいね。

そしてここでの「待つ」は「迎える」という意味があります。院は二人を非常に喜んでお出迎えになったということですね。ですから、すぐさま「こちらへ(参上せよ)」とお呼び寄せになって、中門あたりにいた二人を邸の内部へ導きます。

院は娘である皇女と一緒に暮らしていました。主人公達は皇女が居るであろう部屋の前を通る際に「この中に皇女様がいらっしやる…」と、非常にどきどきしていたのでしよう。「御簾」はほんのりと向こう側が透けて見えますから、皇女に素晴らしい様子を見せようと二人は格好を付けて歩いていたのでしょうか。

# 強者の戦略

「『今宵は内の御遊びなどもやと思ひつるを、暇いとものせられけるを。』（五）わざとこそおどろかすべかりけれ」とのたまはす。」

発言の理由説明問題です。「おどろかす」は「誘う」というのに注意して下さいね。しつかりと注釈を見ましょう。「わざと」の意味は一旦置いておくとして、院はどうして二人に向かつて「誘うべきだった」と言っているのでしょうか？

発言の冒頭を見てください。

○内——内部、内裏、天皇

○遊び——詩歌管弦の遊び

どちらも、超基礎事項ですね。中秋の名月の晩ですから、院が琴を弾いて楽しんでたように、内裏でも月明かりのもとで詩歌管弦の遊びが行われていても不思議ではありません。注意すべきは「御遊びなどもや」の「や」です。疑問・反語の係助詞「や」ですね。疑問で訳すと、「内裏の詩歌管弦の御遊びなども(ある)だろうかと思つたが」。反語で訳すと、「内裏の詩歌管弦の御遊びなども(ある)だろうか、いやない、と思つたが」となります。どちらで解釈するかは、次を見て判断しましょう。

続く「暇ものせられけるを」は、次の語に注目する必要があります。

○ものす——ある、いる、行く、来る、生まれる、くをする

○られ——尊敬の助動詞「らる」の連用形

「ものす」はあらゆる訳出が可能な動詞ですが、今回は「(暇が)ある」と訳しましょう。助動詞「らる」は自発・可能・受身・尊敬の4つの意味がありますが、今回は「暇がある」と結び付いていますから、「尊敬」を採用するのが良いでしょう。これらを合わせると、院の発言は「(お二人には)暇がございましたね」となります。

院が「(お二人には)暇がございましたね」と意外そうに発言しているということは、もともとは二人には予定がある(＝暇ではない)と思つていたということですね。ここで、先ほど話題に上がった「内裏の詩歌管弦の御遊び」が登場します。

院は、「二人は内裏の詩歌管弦の御遊びに参加しているから暇では無いだろう」と考えていたんですね。(ですから、先ほどの係助詞の「や」は疑問で解釈すれば良いでしょう)しかし、二人には院の住む邸に遊びに来る時間があった。院から招かれたわけではなく、二人の方から自発的にやって来てくれたので、院は傍線部(エ)で「二人を(みずから)誘うべきだった」と考えたというわけです。「わざと」というのは「故意に」という意味もありますが、「正式に」という意味もあります。(ここでは、「二人を正式にこちらから招くべきだった」くらいの意図の発言と捉えておきましょう。

問二の解答としては「内裏で詩歌管弦の御遊びに参加していると思つた宮の中將と殿の中將が、わざわざ夜更けに自分の邸を訪ねてくれたから」くらいになるでしょう。



## 「宮の中將」

### まづぞ思ふ都の秋の月見ても君すむ宿の松風の声

和歌の解釈問題です。和歌は詠まれた状況を踏まえて考える、5・7・5・7・7で区切って考える、というの皆さん分かっていますね。

今回は設問条件に「掛詞に注意しながら」とあるので、まずは掛詞を探しましょう。掛詞を探す際には、

1 平仮名であること(たまに漢字のものもあります)

2 「本文の流れ」と「和歌の流れ」両方に適合するものであること

を意識する必要があります。

今回は、不自然に平仮名になっている「すむ」が見つかると思います。「君すむ宿」なのであれば、「君住む宿」と書くのが一般的です。それがわざわざ平仮名になっているということは、別の「すむ」という意味が隠れている可能性があります。

和歌の流れ上スムーズに思い浮かべることの出来る漢字以外は、本文から探すようにするのが基本です。探してみると、本文の1行目に「月はふけゆくままにいとど澄みのぼりて」とありますね。ですから、ここの「すむ」は「住む」と「澄む」が掛けてあると考えることが出来ます。本文では「月が澄む」となっていますが、和歌では「澄む松風の声(音)」と解釈をした方が綺麗に繋がります。「澄む」対象が違ってはいますが、このようなパターンはよく見られますので、臨機応変に対応しましょう。

掛詞を特定することが出来ました。あとは滑らかな現代語訳です。和歌を区切ると、「まづぞ思ふ／都の秋の／月見ても／君すむ宿の／松風の声」となりますが、初句「まづぞ思ふ」が終止形で言い切りの形になっていますので、初句切れだと考えることが出来ます。(「思ふ」だけを見ると連体形の可能性もありますが、「思ふ都」や「思ふ秋」というような連体修飾は違和感がありますから、今回は終止形だと分かります)

では、句切れを倒置で処理するか、単なる句点(「。」)で処理するか考えてみましょう。まず、単なる「。」で処理してみます。「まづ思う。都の秋の月を見ても、君が住む宿に吹く澄んだ松風の音」。次に倒置で処理してみましよう。「都の秋の月を見ても、君が住む宿に吹く澄んだ松風の音をまず思う」。どちらでもおかしくはありませんが、倒置の方が日本語としては滑らかですので、模範答案は倒置を採用します。また、院に向かつて詠んだ和歌ということを考えて敬語のニュアンスを加味して模範答案とします。「都の秋の月を見ましても、あなたが住む宿の吹く住んだ松風の音をまず思い浮かべます」。

中秋の名月の晩、都で月を見ながらも、洛西に住む院のことを真っ先に思い浮かべたという意味ですね。都から離れて暮らす院にとっては、この上ない慰めの言葉になったと思います。今回は複雑な比喻もない和歌でしたから、掛詞にさえ気をつければそのま

ま現代語訳ができましたが、もう少し難しい和歌になると、詠まれたシチュエーションをしつかりと踏まえる必要が出てきますので注意しましょう。

## 「殿の中將、

### （を）飽かなくに出でし雲居の月影を慕ふ心のいつかおくれむ」

続いて、殿の中將の和歌です。（この部分よりも後の本文は注釈に訳が掲載されていますから、解説を割愛します。）この和歌については現代語訳ではなく、比喩の説明が求められていることに注意しましょう。まず現代語訳を行い、そこから比喩の内容を考えていきましょう。「比喩」の説明は、答えにたどり着くためにいくつかのルートがあります。今回は、一番ベーシックな和歌が詠まれた状況、ひいては本文全体の流れを踏まえて答えにたどり着く方法を見てみましょう。

まずは字義通りの現代語訳をすることから始めます。

○飽かなくに——名残惜しいのに・まだ飽き足りないのに

○いつか——いつたいたいつか、いやそんなことはない

○おくれ——劣る（「おくる（後る）」の未然形）

「後る」の解釈が難しいと感じたかも知れませんが、古文で「おくる」と言えば、「死に後れる・先立たれる」なのですが、今回は人の生死の話をしている場面ではありませんから、この訳出はふさわしくありません。「後る」を「劣る」と解釈するのは、現代では「後れを取る」という形で残っています。また、「いつか」の解釈も一ひねりきいていますから、こちらの訳出が思い浮かばなかった人はしっかりと押さえておきましょう。

「まだ名残惜しいのに雲居から出て行ってしまった月影を慕う心は、いつ（人に）劣ったでしょうか、いやそんなことはありません」。ストレートに解釈してしまうと、この和歌を詠んだ殿の中將が、「月を慕うことにかけては私だつて負けていません！」と主張している歌になってしまいます。ちよつと唐突な感じですよ。

明らかに、この和歌の主役は「月」で、殿の中將がそれを慕っているというのが和歌の趣旨です。比喩が使用されていると言うことは、見かけの主役・趣旨の裏に、本当の主役・趣旨が隠れているということです。では、この場面で殿の中將が本当に慕っているのは何でしょうか？ しつかりと状況把握できている人であれば分かりますね。宮の中將と連れだつてわざわざ会いに行った、「院」を慕っているんです。そうすれば、院に対して「院を慕う気持ち私は私だつて（宮の中將に）負けていません！」と伝えていることになり、洛西で過ごす院に対する慰めの言葉となり得ます。

「月」が「院」の比喩だと分かれば、「月」が出て行った「雲居」も、院が出て行っ

# 強者の戦略

た「宮中」のことであると分かりますね。（単語の知識として「雲居」＝「宮中」と知っていた人は、こちらから考える方がはやく正解にたどり着いたと思います）

よって、問四の解答は、「雲居が宮中の、月が院の比喩となっている」が正解です。殿の中将は名月に託しながら、「まだまだあなた(院)には帝として在位して欲しかったのですが、宮中から出てこの洛西にいるあなたを慕う心は、宮の中将にも負けません」と言っていたのです。

少し横道に逸れるのですが、この歌にはベースとなる古歌が存在します。古今和歌集や伊勢物語に見られる、「飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端にげて入れずもあらなむ」という和歌です。この和歌は、「まだ眺め飽きないのに、もう月が隠れるのだなあ。山の端よ、逃げて月を入れないでほしい」という意味です。雲居から「出て行く」と、山の端に「入って行く」。月。詠まれているモチーフは逆ですが、初句の「飽かなく」という表現や、月を愛でる気持ちを表しているという共通点が見られます。

古歌を覚え、それを用いて自分の和歌を詠んだりコミュニケーションをとったりすることは、古文の世界の人たちにとって非常に大切な教養でした。いつの世界も教養身に付けるといえるのは大変ですね。

それでは、通釈と解答です。

## 【通釈】

「やはり院にお目に掛かりたい。今夜、どのように月を眺めていらつしやるだろう」と推し量り申し上げて、皆が馬に乗りかえて嵯峨に参上なさったところ、二人が思った通り、院はお休みにならないご様子で琴の御琴を弾き興じていらつしやり、あたりの松風までも(秋らしく)何となく寒く感じられる中で、(二人は)笛を同じ調子に吹き合わせて、中門のあたりにたたずんでいらつしやるのは、この上なく風流である。

(院は)非常に喜んで(二人を)お出迎えになる。すぐに、「こちらへ」と呼びがあつたので、こちらでも姫宮のいらつしやる御簾の前を、死ぬほど想っていらつしやるのだらう、たいそう心遣いしながら歩み出しながらご様子は、宮の中将、殿の中将ともに素晴らしい。「今夜は内裏での詩歌管弦の御遊びなどがあるだろうかと思っていたが、お暇があつたのですね。正式にお誘いするべきでした」と(院は)おっしゃる。

(宮の中将は、)

都の秋の月を見ましても、あなたが住む宿の吹く住んだ松風の音をまず思い浮かべます

殿の中将は、

まだ名残惜しいのに雲居から出て行ってしまった月影を慕う心は、いつ人に劣ったでしょうか、いやそんなことはありません(まだまだあなたには帝として在位して



欲しかったのですが、宮中から出てこの洛西にいるあなたを慕う心は、宮の中将にも負けません)

と申し上げなされたが、この殿の中将は酷く嫉妬をなさったあの宮の御子なのであった。

## 【解答】

問一 (ア) やはり院にお目に掛かりたい

(イ) 思った通り、院はお休みにならないご様子で

(ウ) あたりの松風までも何となく寒く感じられる中で

問二 内裏で詩歌管弦の御遊びに参加していると思った宮の中将与殿の中将が、わざわざ夜更けに自分の邸を訪ねてくれたから。

問三 都の秋の月を見ましても、あなたが住む宿の吹く住んだ松風の音をまず思い浮かべます。

問四 雲居が宮中の、月が院の比喩となっている。